

ちゅうえつの風

2004.11.05号

【発行人】

東京災害ボランティアネットワーク

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1

セントラルプラザ 10F TVAC 気付

Tel 03-3235-1171 fax 03-3235-0050

E-mail office@tosaibo.net

新潟中越地震支援第二弾

東京災害ボランティアネットワークは、新潟中越地震の支援活動を始めて二週目に入りました。10月29～31日の第一弾の55人に続き、東京災害ボランティアネットワーク参加団体に呼びかけて、調理師・栄養士を中心に58人ものボランティア派遣となりました。

車窓から見た被災地

今回は東京災害ボランティアネットワーク事務局長上原と事務局福田が先遣隊として、新幹線で新潟入りし、現地調査と、明日以降の活動先への挨拶をおこないました。

先遣隊は、越後湯沢駅から高速道路で小千谷市に入りました。今回の地震で閉ざされた関越高速道路ですが、約2週間を経たいま、急ピッチで復旧作業が進められています。高速道路を通行中の車窓から見た風景は、崖崩れの痕とブルーシートに覆われた家屋が点在し、「被災地に来た」ことを実感させるものでした。とは言っても高速道路から見る被災地は、高い視点から見る被災地であり、人の悲しみや苦しさはわからない風景でした。

ちなみに、本日午後4時をもって、最後まで緊急車両のみ通行可能だった小出～長岡間にも一般車両が通行可能となりました。

小千谷市内の様子

小千谷市内は全壊・半壊の家屋が点在する風景と、田んぼ・畑が広がる風景が交互に現れる地域でした。今は赤紙(全壊判定)、黄紙(半壊判定)、緑紙(安全判定)が各家屋に貼られ、すでに被災家屋の倒壊判定が出されていました。道路は時折段差がある程度で、それほど走りにくい印象はありませんでした。

余震

小千谷市内に入ってすぐの午後3時頃、突然車がバウンドし始め、電線が大きく波打ち始めました。余震です。すぐにラジオをつけ、震度を確認しました。ラジオからは震度3の声。

ある大学教授の話では、今回の災害は「余震災害」と呼んでもいいというほど、余震が続いています。また別の大学教授の話では、これは余震ではなく、一連の「群発地震」だそうです。いずれにせよ、大きな地震が幾度となく襲うという、被災者にとっては大きな恐怖を与える災害となっています。

小千谷市山寺地区

小千谷市山寺地区は、先週の第一弾でも東災ボが支援した地域となっています。湧き水が滾々と流れ出る場所が文字通り井戸端会議の場となり、被災後は地域の支援拠点となっています。今日も自衛隊によって運ばれた支援物資を、地域の人々が手分けして班毎に手配し、それぞれ担当の人が車で取りにくるという場面がありました。第一弾後に「来週も来ます」と伝えてあったこともあり、すでに地域の回覧板で東災ボが支援に行くことを告知してくださっているようです。

東小千谷小学校

避難所となっている東小千谷小学校にも寄ってきました。小千谷市の職員さんはもちろんのこと、応援部隊として、神奈川県職員さんが支援に入っているらしく、「神奈川県」の表示のある制服を着た方が数多く見受けられました。

話を聞くと、「炊き出しは自衛隊さんがしてくださっているので、子どもの遊び相手になるようなプログラムを」ということでした。急遽、綿菓子や風船遊びなどを検討することになりました。

小千谷市災害ボランティアセンター

小千谷市災害ボランティアセンターでは多くのボランティアがちょうど活動を終え、活動報告を記入している時期でした。

平日では約300～400人、週末では1000～1500人ほどのボランティアがボランティアセンターを窓口被災地で活動をしているようです。現在は、保健師・看護師・介護士などを中心に避難所の支援を主な活動としているそうです。

本日ボランティア活動をする皆さんへ

これから皆さんは被災地へ入り、被災者の方々と顔を見合わせながら支援活動することになります。皆さんに求められることは、「被災者の方に心を寄せて支援すること」です。

しかし、もうひとつ、重要な活動があります。それは、被災地ではなく、自分の地域で、自分のすぐそばで困っている人に対し、心を寄せて支援することです。是非、皆さんは今日、そして明日の活動で感じたこと、学んだことを活かして、自分の地域で実践していただきたいと思います。

東京災害ボランティアネットワーク
事務局長 上原 泰男

ちゅうえつの風

2004.11.06号

【発行人】

東京災害ボランティアネットワーク

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1

セントラルプラザ 10F TVAC 気付

Tel 03-3235-1171 fax 03-3235-0050

E-mail office@tosaibo.net

長岡市立柿小学校

柿小学校チームは午後3時からのお汁粉がスタートだったこともあり、小千谷市内を回って様子を見てから長岡市に入りました。小千谷市と長岡市の違いとしては、小千谷市には交差点のいたるところにおまわりさんが立っていたり、行き交う車が災害支援車であったり、最も被害が大きいと言われる所以を感じられました。しかし、決して長岡市が大した被害でないわけではなく、山崩れや道路の陥没なども数多く見受けられるなど、大きな被害が出ていました。

柿小学校での炊きだしメニュー

午後3時にお汁粉を250食、午後5時半にはトン汁、ダイコンサラダ、マッシュポテトをそれぞれ500食配布しました。避難所には昼間ということもあり、500人全員が避難しているというわけではありませんでしたが、寝泊りは500人規模ということでした。炊き出し支援をする側としては、炊き出しをする時間と配布量を事前に考えた方がいいかもしれないと感じました。

被災者の方との会話

実はそれほど被災者の方と会話はできませんでした。ほんの少しできたけでした。「テレビマスコミだと、水道・電気・ガスなどの主要なライフラインが開通すると見通しが明るいというが、下水道がきちんと復旧していないと、結局他のライフラインが生きていても使えない」という話を聞いて、確かに下水道が整備されていないと完全な復旧とは言えない、という当たり前のことに、改めて気がつきました。

それにしても、被災者の方との会話はほとんどできませんでした。炊き出しの作業に追われてしまったこともあるし、避難所の外に出てくる被災者の方が少なく会話する機会がなかったこともあります。でも、何よりも、小部屋に仕切られてる避難所に入って話を聞くには時間的に余裕がなかった。

もし被災者の方と会話ができたら、普通の日常会話ができればいいのかな。避難所生活でストレスが溜まっている被災者の方に、「がんばって」「何か困ったことはありませんか」とは気軽に言えないし。

今日の活動

今日の柿小学校チームは東小千谷小学校で、お汁粉のみのメニューということなので、幾分余裕があるだろうから、炊き出しを一生懸命やるとともに、避難所の実態のようなものを自分の目で確かめたいと思います。

伊草 正剛

小千谷市山寺地区

車から見た小千谷市内は、テレビで見るよりもショッキングだったというのが初めの印象です。やはりテレビなどである部分だけを見ると、全体を見ていくという視点では、大きな違いがあるなと感じました。

山寺地区でのメニュー

昼食として、けんちん汁、焼きそば、チャーハン、ごぼうサラダ、こぶきいもなどを作りました。実は昼食時の12時には間に合わず、被災者の方が行列を作って待ってもらうことになってしまったのですが、一言も文句も言わず、「ありがとう、ありがとう」と言われるのはちょっとツライ気がしました。

午後3時には、糸こんにゃくのきんぴら風、ふるふきダイコン、お汁粉を用意して地区の方々に振舞いました。お汁粉は好評だったのですが、お餅が少なくちょっと気の毒な気もしました。

子どもたち

山寺地区に到着するなり、近くの子どもたちがテントの近くで遊び始めてました。折り紙や風船を使って子どもたちと一緒に遊んだんですけども、山寺地区の子どもたちは素直な感じがしました。自分の地元では、子どもたちとあまり接することがないから比較はできないけども、それにしても、地震を体験した子どもたちが気丈なのは不憫な気もしました。地震を体験した子どもとは思えなかったです。

湧き水

山寺地区には湧き水が出ている個所があり、地区の方々が集まり、各班に支援物資を配布するなど、そこが地域の支援拠点となっていました。まさに「いのちの水」という雰囲気でした。

地域のつながり

山寺地区では、なべを持って炊き出しのトン汁などを取りに来る人がいました。話を聞くと、近所のおばあさんにも配るということでした。地域のつながりが強いなと思いました。また、地域のお母さんたちが一生懸命働いているのを見て、女性は強いなとも思いました。

会話の中で

被災者の方々は普通に世間話をしていましたが、話の中に、昨夜(11月5日深夜)の地震で「飛び起きたよ」「気づかなかったよ」という会話が普通に出てくるのを聞いて、一

見元気に見えても、やっぱり地震への恐怖や不安があることが感じられました。また、去年から地震への意識が高まったけども、ちょうど忘れかけていた頃の地震だったよ、なんていう話も出ていました。

支援が必要なところ

今回は一応、小千谷駅の真裏ということもあり、いわば小千谷市の中心部への支援だったと言えると思いますけども、もしかしたら、市内の中心から離れた山間部では、もっと支援が必要なかもしれないと思いました。

今日の活動

配布を早くして、待たせるようなことがないようにしたいですね。要領良くやって、多くの人に食べていただきたい。そして、昨日の「ちゅうえつの風」でも書いてありましたが、少しでも被災者の方々に気持ちを近づけたいと思います。さらに、難しいですが、自分の地域の方々にも気持ちは向けられるようにしたいと思います。

大森 久美子

東小千谷中学校

東小千谷中学校の避難所は、先週に引き続いての炊き出し活動となりました。先週も活動していたこと、週中も頻りに連絡を取っていたことなどから、今回はそれほど違和感なく入っていけました。

ちなみに、この避難所は、全国曹洞宗青年会の方々が継続して支援している避難所のひとつでした。

設備

この避難所の飯炊き場は、広いスペースが確保されていて、曹洞宗のお寺から持ってきた大きな釜があり、さらに、支援者たちが置いていった食材、調味料、資機材が数多く揃っており、支援する側から見ると、主な食材さえ確保できていれば、設備環境としては悪くない場所といえます。

ただ、薪を燃料とする釜は使い辛く、融通も利かないという欠点もあります。

汁物

いろいろと考えて、ある程度のメニューの幅を持たせて避難所に入ったのですが、結局昼食はオーソドックスなトン汁に決定しました。どうやら、やはり汁物が好評のようで、被災者の方々のリクエストもトン汁でした。

おやつのお汁粉をはさみ、夕食はマーボー豆腐だったのですが、お米は炊くことができず、アルファ化米となってしまいました。正直、先週に引き続いてのアルファ化米になってしまい、申し訳ない気持ちと、何としても一度は炊いた米を提供したいと思いました。

被災者の方々とのふれあい

先週に引き続き、バスを仕立てて避難所内の校庭内へ入って行きました。最初は仰々しい感じを与えるかと思ったのですが、被災者の方々からすると、「またあのボランティアさんたちが炊き出しに来てくれている」とはっきりとわかるため、逆によかったのかもしれないとも思いました。

それにしても、一週間前と比べて、町会長さんはお疲れのようでした。本人曰く「限界」だそうです。一週間避難所に詰めっぱなしという状況を考えると当たり前ですが、見ていてもつらそうでした。それでも、新潟出身のわたしに親近感を持っていてくれたのか、待っていてくれた雰囲気を感じられ、本当にうれしかったです。

今日の活動

何とかして、アルファ化米じゃなくて炊いたご飯を提供したい。できれば丼物を提供したい。その上で、被災者の方々に喜んでもらえればありがたいと思っています。

活動する者としては、和気あいあいとした雰囲気の中で活動できることが一番。怪我なく、無事に終われることを願っています。

真島 明美

東京へ

今日で第二期新潟中越地震支援活動を終え、東京に戻ります。2日間という非常に短い支援活動で、決して十分な活動ではないかもしれませんが、皆さんの精一杯の支援は、必ず被災者の方々へ勇気と元気を与える活動であるはずですよ。

そして、被災地は、皆さんに大きな「気づき」を与えてくれているはずですよ。その気づきをじっくりと考え、そして、自分の地域で、自分の職場で、自分の家族で活かしていただきたいと思います。

その第一歩として、是非皆さんの家族に、職場の同僚に、今回の活動の報告をしてください。自分が気づいたこと、自分が悩んだこと、を話してください。こんなことから、次の第二歩へ第三歩へつながれば今回の支援活動がより大きな意味を持つてくるのではないのでしょうか。

東京災害ボランティアネットワーク
事務局長 上原 泰男

ちゅうえつの風

2004 番外号

【発行人】

東京災害ボランティアネットワーク

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1

セントラルプラザ 10F TVAC 気付

Tel 03-3235-1171 fax 03-3235-0050

E-mail office@tosaibo.net

ホームレスと呼ばれる方の参加

第一次・第二次新潟県中越地震救援活動では、「ホームレス」と呼ばれる方々がボランティアとして参加されていました。東京災害ボランティアネットワーク参加団体の、山谷のホームレス自立支援団体「ふるさとの会」が就労支援している方々です。

実は地震直後、最初にボランティア派遣の申し出が東災ボ事務局にあったのも彼らでした。「炊き出しだったら道具もあるし、ノウハウもある。是非派遣してください」という、何とも頼もしい申し出でした。

第一次派遣・第二次派遣を通して、炊き出し道具とともに、10名ほどの方が参加してくださいました。

三宅島島民の方の参加

ホームレスと呼ばれる方々に続き、第二次ボランティア派遣では3名の三宅島島民の方々が支援活動に参加してくださいました。2000年9月から全島避難を余儀なくされている三宅島島民の方々が、同じように避難生活をされている被災者の方への支援活動へ参加いただけました。

今回参加したきっかけはなんですか？

地震直後、すぐに何かできないか？何かできるのではないかと思いました。でも、具体的にどうすればいいのかかわからず、一人では何もできないと諦めかけていました。でも、東災ボが地震後に支援を決定し、息つく間もなく、どんどん具体的に支援の方法を形にしているのを見て、「今行けるのであれば」「行けるのに行かなかった、支援ができるのにしなかった」では後悔してしまうと感じ、思い切って東災ボ事務局の方に「三宅島島民として参加したい」とお願いしてみました。

島民としてというのはどういうことですか？

みんなが一生懸命頑張って支援しようとしているのを見て「三宅の時もこうだったんだな」と思いました。それをそばで見ている、私たちが支援していただいて、教わったことを、支えてもらったことをお返ししたいと思った。三宅島の支援では多くの方が関わってくれたから、ほんの少しでもお返ししたい気がした。実は参加した時は、結構緊張してたかもしれない。

実際に活動に参加してみて、どうでしたか？

正直、無力を感じてしまった。気張って参加してみたけれども、一人では何もできないなと思った。今回は東災ボというチームで支援活動に参加したからいろいろな支援ができたかもしれないけれども、もし自分ひとりだったら何もできないと思った。

硬い表情で「ありがとう」と言っている姿を見て、ツラくなってしまった。私たちにもそんな時があったなと思い、「言いにくかったら言わなくてもいいよ」と思った。

ボランティアの活動が被災者のためになってない？

そんなことは決してない。でもそれを受け入れるだけの余裕が被災者の方に今はないのかもしれないと思った。実際自分が被災者の時はそんな時期もあったし。そんな時、どんな支援が自分にはうれしかったかな、と考えてみた。

どんな支援が必要でしたか？

一番うれしかった、一番受け入れられたのは心配してくれる気持ちを伝えてくれて、何となくそばにいてくれることだった。だから、支援するとか、何かできるとか、何をすべきかとか考えるんじゃないし、普通に心配してる気持ちを伝えればいいんじゃないかと思った。実際に普通に心配している自分がいたし、そのまま自分の気持ちを伝えて話しができればいいんじゃないかと思った。

そんな風に思いながら声をかけて、「困ったね」「ツライよね」と一緒になって困った思いやツライ思いを共有した。中には私が三宅島島民と知って、「負けないでね」と励まされる場面もありました。その時には、別に「何ができるか」「何をすべきか」なんていうことはまったく考えてなかった。支援しているという感覚すらなく、普通に心配して、普通に話してました。

参加してみて、数日経ちますが、今どう思いますか？

自分に何か支援ができたのかどうかはわかりません。でも、お互いに、心配して、心配されて、という中で何かを共有できたような気がするし、「一緒に話をする」という大事な支援がわかってよかったと思っています。

坂上由香 / 坂上幸一郎

さまざまな方の参加

東災ボのボランティア派遣には、調理師・栄養士などの専門職の方々や、ホームレスと呼ばれる方々、そして三宅島島民の方々とさまざまな方が参加してくださいました。

一方的な支援ではなく、厳しい日常を抱えながら、同じように厳しい生活をなされている方へ支援する中で、お互いが励ましあえるような交流が今回の支援プログラムの中でなされたことをうれしく思います。

東京災害ボランティアネットワーク
事務局長 上原泰男